

審査の結果の要旨

氏名 田中智行

中国明代の末に作られ、「四大奇書」の一つに数えられる長編白話小説『金瓶梅』は、他の三作(『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』)が、明代以前の前史を有する、いわゆる世代累積型の成立過程を持つものに対し、その作者名は不明ながら、ある一人の作者が創作した個人創作型の作品であるとされる。従って、『金瓶梅』は、他の作品に増して、作者の意図や創作態度などを考究するにふさわしく、またそうした検討が要求される作品である。本論文は、『金瓶梅』本文の細部との格闘を通し、作者の創作手法、さらにはその背景にある作者の世界認識にまで迫ろうとする試みである。

序章においては、創作手法論の視点から、近代以降の『金瓶梅』の評価史、研究史を検討し、問題点を抽出する。

第一章「明刊各本の序文と導入部」においては、『金瓶梅』の二種の明刊本、「詞話本」と「崇禎本」とを比較し、より原型に近い「詞話本」には、「淫」や「迷」それ自体をまずは正面から描き、読者をその中に引き込むという描き方の特質があると指摘する。

第二章「張竹坡の『金瓶梅』批評について」では、作者の立場に視点を置き、すべてを作者の意図の反映として作品を解釈せんとする点を、張竹坡の批評の特質として指摘する。

第三章『『金瓶梅』描写論—人物・情景描写について—』、第四章『『金瓶梅』構成論—第三十九回を中心に—』、第五章『『金瓶梅』の感情観』が、『金瓶梅』の創作手法をテーマとする本論文の中心部分である。第三章では西門慶の人物像が一見矛盾していると思われる第三十四回の描写を取り上げ、その矛盾の背景には、『金瓶梅』作者の「人物の一貫した強固な性格やその発展よりも、家庭や社会の諸関係にあって人間が見せる多様な心理の一つ一つを読者が実感できるように描写する傾向」があることを指摘した。第四章では、『金瓶梅』の小説構成法、特に第三十九回に顕著な回内部の対偶構成について論じ、一つの現象を異なる視点から描き出す複眼的な表現が、対偶構成のうちに巧みな効果を上げていることを明らかにした。第五章では、作者が人物たちの感情を描くにあたり、強い欲望や感情の煩を厭わぬ描写により、また既存の文芸作品の引用などの手法によって、作中人物のある「気分」に読者をも巻き込み、その上でその場面外の観察者の視点に読者を導き、「気分」をも客観視できるように小説展開を工夫していると指摘した。

終章(結論)においては、上記各章の結論を総括し、『金瓶梅』の、読者を作品世界に自然に遊ばせることにより、内的な真実を実感的・体験的に悟らせたうえで、それを読者に反省的に考察させるという複眼的手法について整理し、『金瓶梅』の特色を明らかにした。

ここで明らかにされた創作手法が、他の通俗文学作品とどのような継承関係を持つのか、あるいはどのような性格の違いがあるのか、といった位置づけがより明確になるとよいといった望み、あるいは「気分」などの用語にいま一つの明晰性があるとよいといった望みはあるが、これらの点は、『金瓶梅』の表現の特色を明らかにした本論文の価値を低めるものではない。よって、本論文が博士(文学)の学位に十分値するとの結論に至った。